

1999年3月13日13時20分、昨日、舞先生がお父さんから「死と生きる」獄中哲学対話、池田昌子-哲学者、陸田真志-死刑囚の新潮社の新刊本を持ってきてくれた。パリで一緒に食事して帰り着いたのが22時頃、朝の4時迄一かかって一気に読んでしまった。

以下、面白いと思ったところの引用。「世は、騙り」、拙著のオビに私はそう謳いましたが真理を語るということは、世を騙るということに他なりません。あなたが的確に指摘した通り、真理は誰のものでもなく、その表現、伝達のためには、生身の表現者は、いったん身を隠す必要があるからです。相手の気持ちを「わかろう」とする。しかしそれは、やはり絶対に不可能であると思うのです。であれば、同じ人間であるという事から同じ人間の考える事として、相手の気持ち、考えをわかろうとするなら、同じ人間の自分の考えを知る事、自分自身を知る事、そのみが相手の気持ちや考え、つまり相手を知る方法であると私は思うのです。実は、自分の真実と語っている。つまり自分自身と語っているのではなか、それ以外に語る事は実は出来ないのではないかと、思うのです。です。で、私という人間がいなくても、「語り相手が失くなる」というその事より先に、「語り相手というものはない」というその事において、何の支障も起こらんのではないかと、思うのです。最後に、文章化が難しいという悩みに、一言、アドバイスを。言葉は、楽器や絵具をもたない人でも、人間である限りすべての人間がもっているものだから、それで、言葉を選ぶのは、難しいのです。一語を選ぶことによって、全人類の全歴史を選んでいくことに、定義上も、事実上も、なっています。十分に、全人生を賭けるに値する仕事だとは思いませんか。だからこそ、いま一度、「実存」の側、人を殺すということは、「なぜ」苦しいものなのか、「いかに」くるしいものなのか、あるいは、そもそもそれはいったい「どういうこと」なのかぜ人は人を殺すのか。「ラスコーリニコフの苦悩」をもっと生な言葉で聞いてみたい。この仕事は、少なくともいま現在の日本において、あなたにしかできません。そうして、次なる歴史に対して、必要な作業だとはおもいませんか。以上引用。

こうして引用してみたものの、さてと次が素直に出てこない。それでいながら喉元まで言葉はきている。ゆくゆくはグッケンハイム美術館長の言葉と重ね合せたいのだが、もう一つ手元にあるクセノン「ソークラテースの思い出」佐々木理訳、岩波文庫から引用。アテーナイに或ときテオドテという美しい女がいたことがあって、承知させることができれば誰とでも交際う女であったが、この女の事をソークラテースのところに行ったうちの一人が話に出して、言葉を絶した美人であり、そうして画描きたちがその姿を写しに家を訪れ、女は風俗の許すかぎり、身体を現わして見せると述べたとき、「それは行って見学するよりほかない」とソークラテースが言った、「なぜと言って言葉を絶した美しさというものは聞いたのではわかりっこないからだ。」するとその話をした男が「すぐみなさん私につ

いておいでなさい」と言った。そこで一同がテオドラーの家へ出掛けいえにゆくと、ちょうどある画描きのモデルになっている最中で、一同この女を眺めたのであった。画工が筆をとめたとき、ソークラテスは言った。「諸君、テオドラーがわれわれに彼女の美を見せてくれたことに対して、われわれの方が大いに彼女に礼を言うべきであろうか、それとも、われわれが見てやったことに対して、彼女の方がわれわれに礼を言うべきであろうか。もし見せることがこの女の利益を増すならば、このひとがわれわれに感謝しなくてはならんし、また見たことがわれわれの利益を増すならば、われわれがこのひとに感謝しなくてはならないであろうが。」、「ま！私にどんな網がありますか。」「あるとも、一つある、しかもなかなかよく引っ括る網、すなわちお前さんの肉体だが、この中に魂が入って居る。この魂によってお前さんはどういう眼つきが人を喜ばせ、じっさい腕力をもっては友人は捕えることも、捕えておくことも、できないであろうが、親切と愉楽とをもってすれば、この動物は捕えることも、そばにとどめておくこともできるのだ。以上、気俎に三つの文章を一引用したが共通する要素は確固とした主張、意見、或いは真理と自ら信じるものをもって相手、大衆を説得しているところではないか？と私には思える。若し私の解釈に間違いなければ説得できると同時に説得できないというジレンマに陥るのではないかと思う。